

## 風景の解放

— サウンドスケープからスメルスケープへ —

開 龍 美

### 1. はじめに

眼に映るものだけが風景ではない。最近ではこれに加えて、音風景、さらには香り風景といった概念が普及している。例えば、環境省は「残したい“日本の音風景100選”」を選定している。これは、平成8年に環境省（当時環境庁）が環境基本計画の趣旨を踏まえ、「全国各地で人びとが地域のシンボルとして大切に、将来に残していきたいと願っている音の聞こえる環境（音風景）を広く公募し、音環境を保全する上で特に意義がある」と認められたものである。そのなかには「鶴居のタンチョウサンクチュアリ」（北海道鶴居村）、「奥入瀬の溪流」（青森県十和田市）といった自然の音環境だけでなく、「寺町寺院群の鐘」（石川県金沢市）、「因州和紙の紙すき」（鳥取県鳥取市）などの生活文化が産み出す音環境も含まれている。さらに環境省は「音風景100選」に続き、平成13年「かおり風景100選」を募集し選定した。例えば、「ふらののラベンダー」（北海道富良野市ほか）、「盛岡の南部煎べい」（岩手県盛岡市）、「富山の和漢薬のかおり」（富山県富山市）、「愛媛西宇和の温州みかん」（愛媛県）である。「豊かなかおりとその源となる自然や文化・生活を一体として将来に残し、伝えていく」ことを謳っており、音から香りへと焦点を移してはいるものの、その趣旨は環境文化の継承と保全を進めるという点で、「音風景100選」の場合と一貫している。音であれ香りであれ、その場所でしか聴くことも嗅ぐこともできない、その土地固有の風土・生活を背景としたそれぞれの音・香りがある。その場所で音を聴く、香りを嗅ぐ体験は、音や香り・臭いそれぞれの感覚個別のものではなく、目で見える風景とともに体感する、視覚と聴覚・嗅覚との協働体験である。そのようにして全体として体験される環境世界が音風景（サウンドスケープ）、香り風景・匂い風景（スメルスケープ、アロマスケープ）という形で抽出され際立てられている。

現在、このように風景概念を視覚的なものから聴覚・嗅覚、そして五感全域に向け拡張し捉え直そうと様々な分野で試みられているが、その背景には、視覚に偏倚し人間の身体から乖離した近代的風景観を是正しようとする動機だけでなく、社会の近代化にともなう環境悪化・荒廃に起因する「風景の危機」がいつそう充進しているという共通認識がある。このことは、私たちの日常的経験を思い起こしてみるならば、容易に理解できるだろう。例えば、新幹線の車窓から眺めるならば、中央集中の都市化のなかでどこの都市の駅前もその都市の履歴と切断され、みな同じものに見えてしまうし、また沿線には険しい傾斜地にまで宅地開発が進み、段々畑のように整備された団地に同じ形状の建売住宅が立ち並んでいる風景を目の当りにする。それから新幹線を降りて駅前の商店街を歩いてみれば、以前あった個人営業の八百屋や喫茶店はそれぞれの事情でみな閉店し、代わってけばけばしい看板を掲げた居酒屋やファーストフード

のチェーン店が増えつづけている。そこには、以前あった地方都市の景観の歴史・文化に支えられた落ち着いた佇まいを見いだすことはできない。

人びとは画一化し荒廃する身の回りの風景の実態から眼をそらし、こうした風景への絶望をなかつたことにする。そしてその裏返しとして、美しき善き風景を「外部」に希求し、これをますます理想化し、また理想化された風景を渴望する自分自身をも美の追求者として肯定する。こうして生活の営みの場にある風景を、人びとはますます軽視するようになる。現実の風景の軽視とは、集団表象としての原風景・探勝の風景を美化・理想化し固定化する一方で、損なわれつつある現実の身の回りの風景、生活の場の風景に無関心であるという内的な矛盾を孕んだ人びとのあり方そのものかもしれない。この現象は、文化がその固有の場所から遊離し非日常化するという近代社会のあり方を反映している。それは、ゴミが散乱する近隣の道路や河川敷の汚染風景に無関心でありながら、美しき風景を求め何処かに旅したり、美術館の風景画展や風景写真展に押し寄せる私たちの姿に暗示されている。効率と機能性をもっぱら重視する社会は、人の生きとし生けるものとしての日常のただ中にあるはずの死を病院の片隅へと隔離したのと同じように、美への志向、美的な生き方を美術館という非日常的空間へと隔離した。景観設計に携わる田村麗丘は「文化と技術を重ね合わせる仕事を通じてもっとも強く感じたのは、美は単体では存在しえないという確信である。周囲には必ず同じレベルの美的環境を醸成する空間や関連する他の美の存在がある。現代の美術の鑑賞法は、例えば古美術作品でも、それが置かれていた一体的環境から切り離し、単体で展示するのが一般的である。美術品が商品でなかった時代は周辺環境と一体で創作され、相互の美を高め合う形でしつらえられたはずで、単体での鑑賞は作者と意図とは異なった、メッセージの半減した美の見方となる。そんな思考は歴史遺産の風景復元にも表れる」と風景甦生の要点を説く（田村 1999：151）。こうした事態への自己批判として、美学の分野でも、芸術作品をもっぱら考察の対象としてきた従来の姿勢を改め、自然環境や生活環境への人間の美的関わりを問う環境美学、日常性の美学が形を整えつつある（西村 2012）。

そこで本論文では、近代の視覚中心の風景概念をサウンドスケープ、スメルスケープに向けて拡張する現代の風景思想の一般的動向を見据えながら、これを「認識主観がすべてのものを対象化する近代的二元論に基づく風景概念」、つまり「対象としての風景」の発見から「場所の感覚に呼応する自己の拠り所としての風景概念」、つまり「場所としての風景」への転換・解放と理解する。現代における風景概念の転換の端緒は、カナダの作曲家レイモンド・マリー・シェファー（Raymond Murray Schafer）が提唱した「サウンドスケープ」の思想であり、それに続く人文主義地理学者ポコック（D. C. Pocock）、ポーティウス（J. Douglas Porteous）等を中心に提起された「サウンドスケープ」「スメルスケープ」の思想であった。サウンドスケープの概念は現在広く知られるようになり、音環境の革新として実際の街作り、都市計画の基本に少しずつではあるが活かされるようになってきている。しかしサウンドスケープに比べスメルスケープの思想はどうかと言えば、これを総合的学の領域として展開し実践に広く活用させるとなると大きな困難が予想される。こうした状況のもと本論文では、最初に人間と場所・風景との関係性について、感覚を切り口として捉え直し従来からの風景概念の更新・解放を説く。次に、サウンドスケープ思想について、音楽芸術思想に留まらず、風景（scape）の概念の拡張を企図するものとして環境思想への展開を辿る。そして最後に、サウンドスケープ思想の根本動向の延長線上に捉えられるスメルスケープ思想について、その内容と可能性を検討する。

## 2. 風景の発見

### 2-1) 風景の概念

風景の類語に景観があり、ともにオランダ語landschap, ドイツ語のLandschaft, 英語のlandscapeの訳語として用いられている。確かに、景観であれ風景であれ、「眺める者」と「眺められるもの」、あるいは「認識する者」と「認識されるもの」の相関関係が前提になって成立するものであるにしても、景観は、環境の一部として科学的に認知された環境の知覚像、特に視覚像を意味する自然科学的概念として使用される傾向が強い。景観としての環境の眺めは主観的、人間的要素を捨象した「遠く隔たった」視点から対象化され捉えられたものである。つまり景観は「空中の視点」から捉えられた鳥瞰図の性格をもつ客観的・分析的概念である。それに対して風景という言葉は、美醜・快不快などの評価がよく施されることから分かるように、主観的・人間的・文化的要素を含む。本論考を開始するにあたり、ここで景観と風景の意味内容について区別をしたところで、以下では、人間との関わりについてより豊かな含意と新たな解釈の可能性を許容してくれる風景の概念を用いることにする。

風景の概念をもって考察を進めるうえで、今ひとつ留意すべきは環境の概念である。風景の概念は、西欧では18世紀に隆盛を迎えた風景画によって生み出されたというのが、多くの専門家が指摘するところである（クラーク 1967：カンボレージ 1997）。風景の概念が近代初頭の絵画運動の影響により発生したのに対し、環境の概念は、19世紀にエルンスト・ヘッケルが生態学を「生のあらゆる条件を含む環境と有機体との関係の科学の総体」とであると定義するにおよび、自然科学の文脈で語られるものとなった。それゆえに、現代においても歴史家アラン・コルバンは「ひとは自分が分析し、(価値)評価する環境の中に身を置いてはじめて風景を構築できるようになるということです。風景は(価値)評価され、環境は測定される。・・・実際、環境というのは一連のデータから成り立っており、いかなる美的評価とも関係なく、それらのデータを分析し、一覧表を作ることができます」(コルバン 2002：39)と述べることができる。逆に、「風景とは、必要とあらば感覚的な把握の及ばぬところで空間を読み解き、分析し、それを表象するひとつのやり方、そして美的評価に供するために風景を図式化し、さまざまな意味と情動を付与するひとつのやり方なのです。要するに風景とは解釈であり、空間を見つめる人間と不可分なのです。ですからここで、客観性などという概念は放棄しましょう」(コルバン 2002：10)と言う。こうしてコルバンは、環境の客観性を強調する一方で、風景の主観性(人間との不可分性)を際立てる。ゆえに、環境のなかに見いだされる土地の起伏の物理的客観的な形姿を個々別々に捉えているだけでは、その土地の形姿は風景とはならない。山や川や森といった個々別々なものを包括し、それらを統一し全体的として捉え、意味づけ評価する主体の働きがあってはじめて風景は生まれる。この点に関してジンメルは「風景の哲学」で次のように述べている。

われわれは戸外のひろびろとした自然の中を歩き、・・・木々や水を眺め、草原や畑を眺め、丘や家々を眺め、光と雲のおよそ千変万化の移ろいを眺める。だがわれわれはその時、どれか一つを見るか、あるいはせいぜい幾つかをまとめて見ているわけなので、「風景」を見ているとはまだ自覚していない。ほかでもない、視野にあるこうした一つ一つのもので、われわれの感覚を束縛してはよろしくないのだ。われわれの意識は新しい全体を、統一体を持たねばならない。もろもろの要素を超え、それらの特別な意味とは結びつかず、それらを

機械的に組み合わせたのでもない、新しい全体を。それが取りも直さず、風景にほかならない。……さてしかし、風景にとっては、ほかでもない極限が、瞬間的であれ持続的であれ、ある視野の地平のうちに包みこまれることが、何よりも重要なことなのである（ジンメル 1999：67-68）。

## 2-2) 対象としての風景

人類はその始まり以来自然環境と関わり、自然に関する知識を深め環境文化を育んできた。しかし、自然環境を風景として眺め評価し、またそのような態度で自然に相對したという意味での「風景の発見」が西洋近代のことであるからといって、古代の人びとが自然に関してまったく何の感情も抱いていなかったと考えてはならない。その点に関しては、最近の文化人類学による未開人の心性に関する研究成果を例証として引き合いに出さずとも、すでにジンメルが指摘していることである。

よくいわれて来たことだが、本来の「自然感情」は近代になってようやく開花したので、近代の抒情、ロマン主義などが、その開花を促進したのだそうである。私見では、これはいささか皮相の論である。未開時代の宗教こそが、私見によれば、特別に深い「自然」への感情を明らかにしているのである。ただ「風景」という特別な形象に対する感覚が、後になって発達してきた。それは取りも直さず、自然全体を統一として受け取る感情からの背反が、この形象を作りだすよう促したからなのである。……このような中世以降の世界の大きな定式が、初めてわれわれに、自然の中から風景を切り取って見る目を与えたのだ。古代と中世が、風景に対する「感情」を持たなかったことは、何の不思議でもない。その対象自体がまだ魂の断乎たる決定と自立への変形のうちに存立していなかったのだ。その後になって風景画が成立し、この決定と変形の利得を保証し、いわば、資本に換算したのだった（ジンメル 1999：70-71）。

ジンメルは、古代・中世と継承されてきたコスモロジーが崩壊しカオス化した自然に対して、風景という新たな統一を自然から対象化して創り出したことに、近代精神の宿命を見届けている。自然との交わりのなかで形成された環境文化のフィルターを通して環境を認識し評価することが避けられず、また風景が環境の解釈であり評価に他ならないとすれば、風景は時代・地域によっては異なったものとして現出する。そして近代に至り認識主観による世界の対象化という動向の中で風景が発見されたにすぎない。

16世紀の西欧では、土地の姿を風景として捉える眼差し、物理的な環境から風景を創造する精神の構えがまだ成立していなかった。カンボレージは、人びとの営みが自然と出会うことにより生まれる風景に関して、14世紀より16世紀にかけてのイタリアに焦点をあて、人びとは自然認識においてまったく風景がコード化されていなかった頃、土地の姿をどう認識し評価していたのかをつぶさに辿った。16世紀の旅人たちが土地の姿について残した記録は、商人や土地測量士などの職人的感性で捉えた土地の経済的価値・地理的特質の記述であふれており、土地の眺めを美しいものとして評価するものはない（カンボレージ、1997：7）。西欧ではキリスト教の普及以降は、聖書に基づくイメージのゆえに、森を始めとする原生自然（ウィルダネス）は否定的な意味を帯びていた。そして中世において山岳は悪魔や龍の住みかとして神秘化され、人びとを遠ざけていたことを忘れてはならない。その後の山岳の神秘性の打破、つまり山岳の世俗化により近代登山が始まる誘因は、一つには近代自然科学の精神の台頭により、山が

自然研究の対象となっていくこと、もう一つには、ルターの宗教改革により聖母崇拜・聖者崇拜にまつわる神秘的要素をキリスト教から一掃し、キリストだけを信仰の対象としたことで、山岳の守護者であった聖母も、悪魔もろとも神秘的山岳から取り除かれたことなどである。近代登山の先駆者ゲスナー（1516-1565）もシムラー（1530-1576）もともに博物学者だった。彼らは、登山のデータを収集し、より困難なルートを選び登頂に挑み、困難な仕事を山に求め、それを順次克服し、自然に対する人間の支配への信念をいっそう固めていったのだった。そして、近代西洋社会において人びとに山への思いをかき立てたのは、ロマン主義者の著作であった。これらの著作を通じて人びとは古典美ではない美、つまり自然美・野性美を山に発見したのである。こうしてヨーロッパにおいては18世紀に登山・山岳美に対する価値観が成熟し、自然美と崇高が認識され、そのようなものとして自然を風景として眺める態度が確立する。風景の観念の誕生は、近代登山の開始、風景画の誕生、そして近代自然科学の誕生と相関しており、それらに通底しているのは、見る主体の成立という事態であった。近代哲学において主体としての人間と客体としての自然環境の対立関係がある。風景概念の確立と表裏の関係にある風景画の成立に不可欠な遠近法（perspective）は、対象化する主体と対象化された客体との距離があって初めて可能となる。「かくて、風景画という一芸術によって世界は知らぬまに少しずつ風景化されてきたのである。そこに人類の非常に大きな変化があった」（リルケ 1953：287）とリルケが述べる時、人間の自己意識が世界を風景として対象化し内面化するという近代的自我のあり方を指摘しているのである。

### 2-3) 浮遊する風景または没場所性

現在の私たちの生活においては、芸術に触れようとするならば美術館・博物館に足を運ぶのが通例であろう。しかしこのような発想は、先述したごとく、芸術が日常の生活の場から美術館・博物館という非日常的空間に隔離されたことに慣らされた挙げ句の判断である。しかしこれは、中村良夫が指摘するように、近代という時代において文化が固有の場所から遊離し非日常化する傾向に符合している（中村良夫 1982：20）。同じく、近代に誕生した「対象化された風景」も、風景を生きる主体と場所から遊離（＝没場所性placelessnessの現象）し、市場経済のなかで商品化され消費される危険性がある。「風景を前にして、ひとは一定の場所で配置につき、目を凝らします。観者の身ぶりはすべて距離に依拠しており、いわゆる風景を凝視するとき、われわれは空間に直面すると同時に空間の外部に身を置いているように感じます。風景を眺めるひとにとってこの空間は一枚の絵、つまり何か自分とは無関係なものになるのです」（コルバン 2002：20）。近代初頭に誕生した風景とは、近代的自我による環境の対象化によって作り出されたもの、対象化された風景であって、次節で論じる「場所としての風景」ではない。主観と客観の二元論の図式に基づいて風景を考察する限りは、風景は対象化されたもので、主観としての私から隔離された対象物に他ならない。眺められる限りでの風景は、本来の地上の眼差しによって捉えられるところの場所との繋がりを失い、浮遊する。したがって対象化されつくした風景は一枚のはがきの風景画と本質的には違いはない。西洋近代初頭における風景概念の確立には風景画の発達が関与したということがそのことを物語っているのではないか。確かに、風景が空間の解釈であるかぎり、その解釈が消滅すれば風景も消滅する可能性があり、その解釈が風景画によって養われたものであるとすれば、風景画が風景を規定するという事態もあり得る。実際にそのような事例には事欠かない。

現代は、グローバリゼーションの侵攻のなかで、人間・社会・文化など様々な局面でその多様性が急速に失われつつあるとの警鐘を耳にして久しい。私たちの生活環境においても、規格

化によってそれぞれにふさわしい場所の固有性がなくなり、「没場所性 (placelessness)」に晒されている。エドワード・レルフによれば、没場所性とは「特徴的な場所の破壊と、場所の意味に対する鈍感さに起因する、規格化された風景の創出である」(Relph 1976 : ii)、あるいは「場所に関する特徴的で多様な経験とアイデンティティの弱体化である」(Relph 1976 : 6) と定義されている。言い換えるならば、没場所性とは、その当のものがその帰属するしかるべき固有の場所から浮遊しアイデンティティを失い、その場所もそれがためにその本来性を失ってしまう事態である。没場所性の窮境を見据え、計量地理学を批判する形で、地理学の主流を形成してきた人文主義地理学 (humanistic geography) のキーワードが場所の概念であったことを忘れてはならない。

### 3. 風景の転換

#### 3-1) 場所のとしての風景

私は自分の人生として与えられた時間を生きていく。しかしここで辿る時間は時計が刻むような同じ速さで流れていく均質な時間ではない。むしろここで問題となるのは、私のその時々気分や体調に応じて、言い換えれば主体である自己のあり方・感じ方により、ゆっくり流れたり、あっという間に過ぎ去ったりするような伸び縮みする時間である。つまり質的な時間であって、生きられた時間である。私が生きている“今”とは、物理的定量的な時間であれば、過去と未来を区切る点であり、その都度の瞬間なのであろうが、実際はその都度の場面“scene, situation”として経験されている。日本語にしる英語にしる (sceneがラテン語のscaena (舞台)。また英語のsituationがラテン語のsituatio (場面・情況) に由来)、その語義と語源からしても、明らかに出来事や事象とともに、それらが執り行われ、また生起している場所が含意されている。つまり、私たちが生きる今は、つねに今を起点に開けた場所として生きられている。その今は、定量的時間の点としての今とは異なり、過去の来歴・記憶を集積し、また未来の可能性をも包含する。そして今を生きる私は、他者から全面的に自立しそれ自体として存在する実体ではなく、生身の身体として環境世界に晒され、いつもすでに世界と他者との複雑な関係性に組み込まれている。それゆえに私という自己は諸々の関係を収斂するところに現出する。

これを踏まえると、ここで言う場面は自己が一方向的に措定するのではなく、他者との関わり・出会いにおいて始めて成立する。その他者とは人間、動植物、自然物、さらには観念・想念をも含むすべての存在者である。記憶に支えられた、その都度の場面の連なりとしての私の生の連続性・一貫性にとまなう確かさあるいは不確かさは、主体の方に即して言えば、自己のアイデンティティの確かさあるいは不確かさであるし、客体の方に即して言えば、場面の連続性の安定性あるいは不安定性に他ならない。場面の安定性とは、自己の人生においては具体的にはライフ・ヒストリー、来歴の確かさとでも言い換えられよう。しかし生きられた時間としての場面は場面であるかぎり、人生という時間軸上の点ではありえず、その都度の拡がり、場所をもっている。またその都度の場面は単純に均等に配列されているものでもない。むしろ意識に内面化された諸々のその都度の場面は、生きられた時間に組み込まれ配列されながらも、その人の生の営みにおいて「中心にある変わることはないより安定した場面」、つまり拠り所となる風景・原風景に関係づけられ組み込まれ、それによって初めて私は、今ここで生き暮らしていることのリアリティ、安定性、落ち着きを実感する。このような拠り所となる「場

所としての風景」とは、自己の定位感・実在感を基礎づけるものである。この事態について、自己の感覚 (sense of self) と場所の感覚 (sense of place) が合致する、あるいは自己のアイデンティティが場所のアイデンティティと重なると言うことができる。

藤原文夫によれば、風景とは「風土によって触発される審美的印象」(藤原 1999: 7) と定義される。風土は、地域の住民がその地の気候を始めとする自然条件に適応し日々の暮らしをたて、その営みを継承し歴史に刻んでいくとき、そこにその地域固有の環境文化が根付くとともにその地域の人びとに自覚されるに至る。ゆえに藤原の定義において、風土の概念が風景の定義に組み込まれていることから推察されるように、風景は個々人に特化される表象を超えて、地域共同体で共有され継承される集団表象でもあることが分かる。地域の自然・文化・歴史を自らのこととして暮らしていく人は、その風土に埋もれ、その風土から立ち上がる風景に組み込まれ、その風景を生きていく。その点からすると、景観が、隔たった視点から環境像を切り取り対象化するところに生成するのとは異なり、風景は、人が自らが置かれた風土に寄り添い、風土を生きることを通して、自分の生きる拠り所として自らのアイデンティティと重なりあう仕方では立ち現れる(中村良夫 1982: 27)。具体的には、個人の来歴における原風景、自分の生家、故郷の山河などをあげることができる。風景が居住の場所への帰属において成り立つ現象であることを考慮すれば、風景体験の積み重ねはその人の固有の場所での住まい方の表現、生き方の表現と言える。このように風景の根源的事態は主体による対象化という説明では見過ごされてしまうことになる。むしろ、風景は自己と他者が差異化し立ち現れる原初的な現象の場である。

### 3-2) 風景の危機と原風景

風景には自然と人為双方の要素が映し出されるものであり、安定した風景には、自然と人為との関係の調和が不可欠であるとする風景観がある。この風景観の系譜は、聖書にあるエデンの園から西欧の田園風景に致る理想に示されているとおりである。そして西欧近代の産業革命以降、社会の都市化・工業化の進展によりロンドンを始めとする大都市圏で環境破壊・環境汚染が問題となるにおよび、自然と人為とのバランスの崩壊が人びとに懸念されるようになり、それとともに風景が不安定なものになったという(宮川俊作 2001: 176)。そうであるならば、風景が発見され風景美の概念の定まる頃には、すでに底流では風景の危機が始まっていたことにある。それがために、近代西欧では調和を失いつつある風景を人間が管理によって保護しようとする姿勢が育っていった。風景の保護と言え、どのような風景を保護の対象とし、どのような基準で保護するのかといったことが自ずと問われることになり、こうして自然と人間との安定した調和を如実に見せる「原風景」を基準にして風景の選別が始まったのである。近代英国ではジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスらが、人間環境の美的秩序と社会経済のシステムの適正なあり方とは表裏一体であるとの立場から、風景の精神的価値を強調した。風景を守ることは、人間の善き生活を守ることであり、風景は人びとにとって倫理的導きにもなりうる、との見方である。しかしながら、「風景保護はある一つの風景解釈を選択することである」(コルバン 2002: 174) ことを思い起こすと、事柄はそう単純ではないことが分かる。風景が人間と環境との関わり方を凝縮し表現しているものであるとすれば、風景には人間と自然との間柄としての環境倫理の問題性が入ってくるはずである。ましてや、風景が人間によって対象化され人間とは隔離された外部にあるものではなくて、人間としての生き方・在り方、ないしは自己のアイデンティティを確かなものにする拠り所であるとの理解に立つならば、風景への関わり方、評価の仕方はそのまま人の生き方として倫理に直結することになる。そして今、コ

ルバンに従い、風景とは空間の解釈の仕方であり、個々人によって相違し、共同体においても共通の単一な風景解釈が見いだしがたいとするならば、諸々の風景解釈に優先順位をつけ風景保護を実施することには大きな困難と混乱を招くことになるだろう。

ある特定の社会集団の人びとには、ある特定の原風景が共有されている。この集団表象としての風景は、その社会集団が歴史的に形成してきた環境文化を反映しており、けっして個々の人びとの個人的表象に還元できるものではない。集団表象としての風景（原風景）は、その集団の歴史と文化を形作る伝承・信仰・文学・芸術・思想などによってさらに強化され、個々人の風景体験の尺度となり、ある意味で個人の風景観・風景評価を拘束する。集団表象としての風景観は、生活の場から離れた自然的な場所の風光明媚を愛好する「探勝的风景観」と生活者の視点から地域の風景を評価しようとする「生活的風景観」の2つに分けることができる（宮城俊作 2001：177）。例えば、日本の地理の特異性と登山の効用を説き、日清戦争時にナショナリズムをかき立てた志賀重昂『日本風景論』は、前者の典型である。それに対して、文学・絵画によって確立され個々人の風景体験の基準・規範として作用する原風景から個々人を解放する必要性を説いた柳田國男は後者の代表である。柳田は集団表象としてある原風景を基準・規範として固定し個々人を縛るならば、それは人びとの将来にわたる風景観だけでなく環境文化もろともに没場所性に沈降させてしまうとの危機感を表明している。

人間は最初のこの自然の印象が、一瞬時の後に消え去るのを惜しみ、もしくはその感動の強烈なるに堪へずして、是を技藝に託して尚暫くの保存を念じたのであつたが、其力が稍剩つて、今は却つて次に来る者の感動を指導せんとして居る。我々の好風景の標準は前代の畫であり、文學であり、しかも往々にして外國のそれであつた。何でも描き出すだけの力を持ちながら、いつも時おくれてやや古い頃の天然を崇拜し、それと一致しなくなった眼前の變化を輕んじようとしている（柳田 1968：415）。

旅をして見たいという若い人の心理は、若い頃に盛んに旅をした私などが片端は知って居るかも知れぬ。風景とは必ずしも原野林野、人に馴れない海川のことはない。我々の同胞が其上へ、数千年かゝつて築き上げたあるもの、その自分たちの知って居るのと違うものを、見てあるきたいのである（柳田 1968：428）。

しかしここで、探勝的风景と生活的風景の関係について説明を補足しておかなければならぬだろう。探勝的风景の典型としては、生活の場から遠く隔たった前人未踏にして崇高な山岳風景があり、生活的風景の典型としては日々の暮らしを営む場である里地・里山風景が想定される。一見すると、探勝的风景として、卑小な自分を圧倒する巨大な山塊は私の存在の彼方にそびえ、私たちはあくまで遠望するだけであり、決して自分が拠り所とする「場所としての風景」とはならない一方で、身近な環境である里地・里山は、自分に山の幸を恵んでくれるだけでなく、水田の蛙や森の鳥たち生きとし生けるものと生命を分かち合っていて生きていくことを実感させてくれると同時に、自分がこの場所に根付いていることをその生活的風景から実感させてくれる、との印象を抱く。それゆえに、「場所としての風景観」は自分が居住者として臨む生活的風景にはあてはまるが、あくまで自分が来訪者・旅行者にとどまる探勝的风景にはあてはまらないと判断しがちである。しかしこの判断は早まった判断である。自分が場所に帰属し場所の一部として自分を捉え直すためには、ディープ・エコロジー思想において指摘された自己と他者との一体化（identification）が前提としてあることを忘れてはならない。一体化と

言っても、私が一体化する他者、つまり自己との連続性・一体性のうちに捉えられる他者は、身近な小動物から巨大な自然物にまで実に多様なレベルが考えられる (Naess 1989: 181)。かわい蛙であれ急峻な山であれ、人間は一体化できる。人間には、蛙に自分自身のあり方を重ね、蛙のことを我が身のことと感ずることもできるし、自分の眼前に聳え立つ山に卑小な自己との無限の隔たりを感じる一方で、その強大な存在に参与し何か言葉にならない力を与えられることもある。他者が蛙であれ山であれ、どちらの場合にしても他者との自己一体化であることには変わりはない。里山であれ山岳地帯であれ、人間は自らにその場所に身を置き、心身を閉ざすことがなければ、その場所への帰属感・一体感を高め、そこから立ち上がる風景が拠り所となる (開龍美 2016: 114-115)。

## 4. サウンドスケープ思想の企図

### 4-1) 意味論的環境

「環境」は、生物の活動を可能としつつ、それを取り巻く周囲の客観的な状態を意味するものであると同時に、そのなかで生命活動を営む主体から切り離してのでは十分に理解できない、主体と相関的な概念である。環境を理解するには、2つの視点がある。1つには、環境を第三者の立場から、「外側」から見る捉え方がある。環境とは、客体的なものとして我々を取り囲み、物理化学的に作用する周囲の条件のシステムである。これによれば、世界には1つの均質な物理化学的な環境だけが存在する。自然科学の多くの分野はこの立場をとる。この立場の最も素朴なものでは、生物と環境の関係は、1つの客体的な環境のなかにあらゆる生物があちこち散らばっているというイメージになる。つまり「容器としての環境」というイメージである。環境が単なる器で、生物がその器に入るモノであるとすれば、器とモノとの関係は非本質的偶然的なものとなる。中にモノがあろうとなかろうと、器は器のままであって何の影響も変化も受けない。しかし「環境」という言葉の原義に立ち返るならば、環境と呼びうるためには、それを環境として生きている生き物、つまり、環境の主体がその中心になくなくてはならない。それゆえに2つ目の環境の見方として、環境はその主体を前提として、それぞれの生物によって固有の仕方でも認識される周囲の像 (image) である、とする立場がある。これによれば、主体の認識能力 (感受能力) の広がりや深さが、その主体にとっての環境を決定する。環境が主体と別個に存在するのではない。環境は主体の内部構造から成立するものであって、外側から客観的に設定することは不可能である。環境と主体の関係については生物学者ユクスキュル (Jakob von Uexkull 1864-1944) の「環境世界論」が明確にしている (ユクスキュル, クリサート 1973)。彼は、客体的なものとしての「周囲状況 Umgebung, surroundings」という意味での環境と、動物たち自身によって作られ、その知覚像によって満たされている「環境世界 Umwelt」という意味での環境を区別する。この立場は、前者の機械論的環境観に対して意味論的環境観と呼ぶことができる。

環境からの刺激は感官をもって感受され、その感覚内容をもって構成されるという伝統的な機械論的環境観に従うとすれば、環境・風景の問題は、環境の認知・構成の端緒である感覚の所在を問うこととなる。感覚とは何か。私たちは感覚を細分化し、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚の五感に分類し、感覚はこれらの総称であると解釈してきた<sup>1)</sup>。つまり、感覚とは眼・

1) 現在では5つの感覚ではなく、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・皮膚感覚の五感に深部感覚・内臓感覚・平衡感覚の3つを加え、全体として8つに分類されている。温冷感覚は皮膚感覚に、重量感覚は深部感覚に属している。

耳・皮膚・鼻・舌といった感官により関知される物理的な与件（データ）の総体であると考えられている。物理的・機械論的環境観を取れば、確かにその通りで、感覚の「実体」は感覚データの“向こう”にある。近代以降特に際立ってくる要素還元論の傾向のなかで感覚は細分化され、それに応じて風景は五感のなかでも視覚にもっぱら定位し考察されてきた。それに対して、視覚偏重の風景概念を矯正する立場からサウンドスケープ概念が提唱されるようになった。サウンドスケープは意味論的環境観の立場を採る。それはシェーファーがサウンドスケープ思想の展開にあたり、その文化的・社会的相対性について述べた以下の指摘にも明らかである。

私たちがいろいろなものをそれぞれ違った方法で聴いているということははっきりしている。また、個人だけでなく、社会そのものがそれぞれ独自の聴き方をしていることを示す証拠がある。例えば、私たちが「集中的聴取」と呼ぶものと「周辺の聴取」と呼ぶものとは、それぞれ聴き方が異なる。人がある音に焦点をあて、ほかの音はただ聞き流すのはなぜだろう？ 音の中には、文化的に差別されていて全く聞かれることがないようなものがあるのだろうか（シェーファー 1992：7）。

サウンドスケープ概念が「個人あるいは社会によってどのように知覚され、理解されるかに強調が置かれた音環境」であると定義されることからわかるように、サウンドスケープの概念とその要素である感覚概念は単に物理的・機械論的なものではなく、「主体によって意味づけられ構成されている」意味論的なものである。つまり、サウンドスケープとは、音環境に対する人びとの関わりを重視する概念である。ある音源から物理的に伝わる音を受け手である人間がただ受動的に受信するのではなく、認知と評価・取捨選択を人間が行いつつ、環境と人間が一体化して生じるものである。

#### 4-2) 感覚の歴史

しかしながら、西洋思想の伝統において感覚は精神に従属し下位に置かれ、常に細分化され考察されてきた。五感のなかでも視覚の優位は、すでに古代ギリシアのアリストテレス『形而上学』に明言されている。「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する。その証拠としては感覚知覚〔感覚〕への愛好があげられる。というのは、感覚は、その効用をぬきにしても、すでに感覚することそれ自体のゆえにさえ愛好されるものだからである。しかし、ことにそのうちでも最も愛好されるのは、眼によるそれ〔すなわち視覚〕である。けだし我々は、ただたんに行為しようとしてだけでなく全くなにごとを行為しようとしていない場合にも、見ることを、言わば他のすべての感覚にまさって選び好むものである。その理由は、この見ることが、他のいずれの感覚よりも最もよく我々に物事を認知させ、その種々相を明らかにしてくれるからである」（アリストテレス 1959：980a）。一見するとアリストテレスの発言に例証される視覚の優位は、そのままに直線的に近代を貫き現代に至っているかのように思われるが、実は事はそれほど単純ではない。このことは古代ギリシャがテオリア（観照）に定位する「眼の文化」であるのに対して、ヨーロッパ中世が「耳の文化」であると言われることを思い起こすならば、頷けることであろう。中世において世界と最も豊かな接触をもちうる洗練された感覚は、聴覚であった。なぜならキリスト教の人格神に対する信仰の核心は傾聴にあるからである。旧約聖書の創世記に記されているように、神の似姿として創造された人間の「似姿性」の本質は、人間は神と対面し対話の関係に入ることにある。つまり信仰とは聴くことで

あって、見ることではないのである。こうした聴覚の優位は16世紀においても変わらず、視覚は触覚の後の三番目に位置づけられていた。そして近代初頭に至りこの五感の序列が変化し視覚が最優位になったと見るのが正しいようである（中村雄二郎 1979：51-52）。H. ブルーメンベルクは『光の形而上学』において、古代ギリシアの眼の優位と西洋中世の耳の優位の対比を次のように述べている。

ギリシア的思考においては、すべての確実性は眼に見えることのうちに基礎づけられていた。ロゴスが引き合いに出すものは、形をもった姿、形相であった。「知」と「本質」（形相としての）とは、語源的にもすでに緊密に「見ること」に属している。ロゴスとは見たことの集大成である。……ギリシア的思考にとって「聞くこと」はいつもまず見ることににおいてさらに確かめられねばならない言明としての憶見（ドクサ）の、真理とは関わりのない無責任な仲介であったのに対し、旧約聖書や旧約聖書によって証言された現実意識においては、見ることはすでに聞くことによってあらかじめ規定され、疑問に付され、あるいは凌駕されている。創造されたものは言葉に基礎をおき、言葉はいつも責任ある約束として被造物に先行している。現実的なものは、聞くことによって指示された意味の地平にあらわれ出る（ブルーメンベルク 1979：75-76）。

そして近代における視覚重視への再転換はロック、デカルトの著作の影響のもと17世紀に始まったと言われる。そのことは、デカルトが真理の基準として「明晰」「判明」という特質を設定していることにも示されている。デカルトは『方法序説』の冒頭において、教会という権威を媒介せずとも、誰でも良識を正しく用いることによって、真理に近づくことができると宣言している。その際に良識を正しく用いる「方法」として4つの規則をあげている。

第1は、わたしが明証的に真であると認めるのでなければ、どんなことも真として受け入れられないことだった。言い換えれば、注意深く即断と偏見を避けること、そして疑いをさしはさむ余地のまったくないほど明晰かつ判明に精神に現れるもの以外は、何もわたしの判断のなかに含めないこと。

第2は、わたしが検討する難問の一つ一つを、できるだけ多くの、しかも問題をよりよく解くために必要なだけの小部分に分割すること。

第3はわたしの思考を順序にしたがって導くこと。そこでは、もっとも単純でもっとも認識しやすいものから始めて、少しずつ、階段を昇るようにして、もっとも複雑なものの認識にまで昇っていき、……

そして最後は、すべての場合に、完全な枚挙と全体にわたる見直しをして、なにも見おとさなかったと確信すること（デカルト 1997：28-29）。

言うまでもなく、デカルトがここで示した「方法」とは、近代自然科学の特徴となる分析と総合を骨格とする要素還元論なのであるが、この方法の4規則のうち一番目に位置づけられている真理の基準が「明晰」「判明」という視覚を前提とする性質であることに注目したい。そしてオングの指摘するところでは、自然科学の手法に集約される西洋近代に特徴的である「総合よりは分析、関与よりは無関心uninterestedness、本質よりは現象の強調」は、視覚の強調と無関係ではない。つまり視覚が事物を感じ取る仕方と似ているのである（オング 1991, クラッセン 1998：23-24）。

先に述べたように、とりわけ西洋では感覚は物理的な作用と見なされたところがある。つまり五感単に世界のデータを収集する取り込み口過ぎないのである。そして感覚は五感に細分されるのが通例となっている。しかし、「五感の形成は現在に至まで世界の全歴史の仕事である」(マルクス、『経済学・哲学草稿』)というマルクスの指摘を待つまでもなく、五感という伝統的な分類の仕方も文化的・社会的に作られたものであろうし、また各感覚に与えられた価値・位置づけもまた歴史的・文化的に作られたものである。つまりは、森羅万象をどのように感じ取るかは文化により異なるのである(クラッセン 1998: 8, 16, 中村雄二郎 1979: 49)。

#### 4-3) シェーファーのサウンドスケープ思想

鳥越けい子の指摘によれば、サウンドスケープ (soundscape) の概念を音楽思想、そして環境思想として明確に提示したシェーファーが担っている課題は、(1) 西洋近代の音楽芸術の制度の抜本的問い直し、(2) 視覚偏重の環境理解の是正、そしてそれに基づく(3) 空間・環境デザインの革新である(鳥越 1997: 32)。シェーファーの著書『サウンドエデュケーション』(1992)によれば、サウンドスケープは、ランドスケープに由来する言葉であるが、ランドスケープのようにその使用は「屋外環境」に限定されず、広く音響環境 (acoustic environment) の概念を捉え直したうえで、私たちがどこにしようと、その私たちを取り囲んでいる「全体的な音場 (the total field of sound)」を意味している(シェーファー 1992: 8)。サウンドスケープは、例えば、私が書斎でパソコンに向かい文章を作成しているときのキーボードの打鍵音、ときおりパソコンから発せられるシグナル音などが全体として私のサウンドスケープとなる。人間にとって音とは何を意味するのか。理性と感性の伝統的人間観によるならば、様々なものの音を聴き取ること、耳を傾けることは、理性に従属する低次の感覚に関わることであり、人間の本質に触れるものではない。しかしシェーファーはこれに否をつきつけ、人間にとって音を聴くことの本質の意味を問いかける。私たちは、自分に耳という感覚器官があって、それに障害がなければ、自ずと音は正確に聞こえる、聴き取れていると思っている。しかし、それは音が本当に聞こえる、実質的に聴き取れていることを保証するものではない。私たち現代人は、ものを聴く能力をますます失いつつある。この危機意識からシェーファーは出発する。

今日世界中どこでもサウンドスケープは変化を遂げつつある。私たちがますます複雑な機械装置に取り囲まれるに応じて、様々な音が人間よりも遙かに速く増殖している。これが世界に騒音(ノイズ)をさらに増やしている。これがために現代文明は自らにノイズに耳を閉ざすようになってきている。こうして現代の人間はそもそも音に対して自らを開かない。自分の嗜好に合う音や音楽に特化して耳を傾け、それ以外の音には鈍感となる。シェーファーは、楽曲「4分33秒」で知られている現代作曲家ジョン・ケージ(John Milton Cage Jr.)以降の世代に属する作曲家である。「4分33秒」という楽曲は3楽章からなり、譜面には「休止 (tacet)」とのみ書かれており、舞台では指揮者、演奏者ともに演奏の態勢に入るものの、4分33秒間は一切演奏せず、会場は沈黙とざわめきだけが支配し、やがて演奏が終わるといふ挑発的な音楽である。ケージは、時代とともにより複雑により体系的になり、その極みに到達しようとしているクラシック音楽に対してアンチテーゼを突きつける形で、音を音として解放する試みをしたのだと言われているが、彼に続く世代に属するシェーファーも、コンサートホールに閉じ込められている伝統的な音楽とその概念を日常性の場へ開放し、音の環境芸術を創り上げようとする。そのうえで音楽家の責任として現代社会の騒音問題にも積極的に取り組む。

シェーファーのサウンドスケープの思想は、ある意味では古代ギリシアのピタゴラス派にお

ける「天球秘曲」(人間と宇宙全体の共振・共鳴)の思想に連なるものである。ピタゴラス派にとって、数の原理が世界の原理に他ならない。つまり彼らは自然世界の中に数的比率を見た。例えば、音楽において様々な音がそれぞれに弦の長さや一定の関係にあり、特に和音は数的に不動の関係によって生じることが知っていた。この知見からピタゴラス派の人たちは、それぞれ異なった速さで回転する諸々の天体が全体として協和音を奏でているという「天球秘曲」の発想に至った。天体の運動がどんなに不規則に見えても、その実相は数比に従って調和(ハーモニー)を実現しているという確信は、ピタゴラス派からプラトンを經由し、後の天文学に計り知れない影響を及ぼした。世界は存在するものたちの様々な音で満ちている。しかし、私たちはこの世界に充ち満ちている音に鈍感になっている、耳を閉ざしている。それは人間と世界・環境との断絶という危機的事態であり、これを結び直すことがサウンドスケープ思想の最重要課題であるとみなせるならば、サウンドスケープ思想の本質は、音楽芸術思想を超えて環境思想にあると言わねばならない。

## 5. スメルスケープ思想への展開

### 5-1) 環境と身体の協働・同調としての嗅覚

サウンドスケープ思想は、私たちが日々の生活のなかで自らの身体で周囲の環境をどのように感じ、どのように受けとめ、どのように暮らしていくのか、そのことを音環境を通じて捉え直すことを求めている。その基本姿勢が、自己閉塞しつつある現在の私たちを身体諸共に、私たちと本来つながり私たちが一部であるはずの環境に向かって打ち開くことにあるとすれば、聴覚を切り口としているサウンドスケープ思想の延長上に、嗅覚という身体感覚に基づくスメルスケープ思想を見出すことができる。そこでスメルスケープの考察に入る前段として、自己と風景・環境を結ぶ感覚のあり方を問い、その過程で近接感覚としての匂いの特質を明らかにし、それを踏まえ、最後にスメルスケープの特質と可能性について検討する。

視覚中心のランドスケープからサウンドスケープ、スメルスケープへの道筋を辿るうえで障害となるのは、これまで感覚は五感に分けられ個別に研究されることが多かったこと、そして歴史において視覚・聴覚以外の嗅覚、触感、味覚は低級な感覚として顧みられることが少なかったことである。人間の嗅覚は文明化とともに退化したのであって、人間にとって動物の名残以外の何物でもない低級な感覚に位置づけられる。それがために、例えばアラン・コルバンの『においの歴史』が指摘するところによれば、19世紀のヨーロッパにおいて民主主義者たちが美しき共和国を夢み、また社会主義者たちが人類の幸福を思い描いていたとき、こうした希望の言説の直下に、もう一つ別の言説として、瘴気(=熱病を引き起こす山川の悪気、毒気)や麝香や黄水仙を語り明かす、感覚に関する言説が存在していることとその資料に、歴史家たちは取り組もうとしてこなかった。嗅覚は軽蔑の対象とされ、ビュフォンからは動物的な感覚と言われ、カントからは美学の領域から閉め出され、さらに後になると、生理学者たちによって進化の単なる残滓とみなされ、さらにフロイトに至っては、肛門性と結びつけられた、こうして匂いに関わる言説はタブーとなってしまったという(コルバン 2002: 312)。確かに、近代初頭以来西洋文化において嗅覚の地位は凋落の一途を辿ってきた。しかし人類の歴史を概観すると、幾多興亡した民族・国家のいずれにおいても、香料が生活において果たす役割は大きく、香料を、つまり香りを求め人びとが莫大な資金と多大な労力を費やしたことがわかる。視覚が知性に近い感覚に位置づけられるのに対して、嗅覚は動物的・生理的レベルにいっそう近

い感覚であると理解されているが、実はそれゆえに匂い・香りは人間存在を深く深く無意識の次元まで支配しているのであろう<sup>2)</sup>。

先史以来繰り返してきた幾多の民族、国家の興亡の裏面には、必ずといっていいほど香料が登場している。香料は権力と高貴の象徴として利用されただけでなく、生存本能に根ざした食生活・性生活上の要求や宗教的な願望に裏付けられている。また、動物の社会では種族の保存に匂いが重要な役割を担っている。(奥田 1986 : iv)。

そもそも視覚を最上位に置き、嗅覚・触覚・味覚を低級なものとする感覚のヒエラルキーは、文化的・歴史的に形成されたものであるにせよ、その前提として、感覚は目・耳・鼻・皮膚・舌といった感覚器官への割り振りに照応して、五感から構成されているという要素還元論の理解があり、また学問がその研究対象を細分化することで専門性を高めていく一般的傾向のなかで、諸感覚の個別の研究が加速されたと思われる。しかしながら、感覚の要素還元論的理解に抗して、感覚は個別に存在するものではないという前提に立ち、なんらかの形で感覚の統合性を究明しようとする立場がある。それは中村雄二郎が指摘するように、古くは古代ギリシアのアリストテレスの共通感覚論に遡るにしても(中村雄二郎 1979 : 7)、現代においてはユクスキュルの環境世界論を経由して、ギブソンの生態学的視覚論に見いだすことができる。

視覚に関する素朴な理解によれば、視覚は外界からの光刺激を受けて網膜がそれを映し出す、つまり模写し、それが神経を通じて脳に伝達され情報処理されるという仕方であり成り立つ。しかし、このような理解は、感覚を人間の感覚が受け取る外部刺激という物理的素材と見る受動的・静態的モデルと呼ぶべきものである。ギブソンは、感覚の受動的・静態的モデルの前提にある二元論を退け、むしろ人間と環境はひとつのシステムを成し、感覚は両者の協働・同調において成り立つとする。それゆえに、感覚の概念は知覚システムに捉え直されることになる。つまり、視覚をはじめ感覚は、世界に対する人間の身体全体の関与において成り立つ動的なものであり、人間の行為と連動し始めて成立する。したがって、感覚は何かを検知することとして、身体とその動き・行為(アクション)がクローズアップされる(ギブソン 2011 : 1-7)。

ギブソンは知覚者のアクションと一体に定義される対象の性質をアフォーダンス(affordance)と呼ぶ。アフォーダンスとは、環境を生きる主体としての自己にとっては、単なる刺激ではなく有意義な情報である。例えば、食物は食べるアクションをアフォードし、動くものは追う、あるいはつかむというアクションをアフォードする。主観と客観の二元論の図式に多少傾斜した言い方をすれば、自己は自らの体勢によって環境にすでに出ている、あるいは組み込まれ一部であることをもって、「自ら(みずから)」の行為と言いつつも、実は自己の動きと連動する環境からのアフォーダンス、即ち意味に応答する「自ずから(おのずから)」のあり方によって環境おける自らの適所を得ている。生態学的に言い換えるならば、環境世界において住み場所(ニッチ)を得ているのである。住み場所、ニッチを得るとは、すなわち自己が環境の一部としてアイデンティティを確かなものにしていくということである

2) 嗅覚生理学の知見によれば、ヒトがもつ五感のうち、嗅覚をコントロールする部分は、大脳皮質のうちより深部にある「古い大脳皮質」である。より表面にある「新しい大脳皮質」が主に知識を関係するのに対して、古い皮質は主に本能を司ると言われている。それゆえ、嗅覚は本能・感性につながる感覚であるとみなされている。以下を参照。浅野三千秋「においの基礎知識-生活におけるにおいの役割-」『繊維製品消費科学』36巻(1995)12号,728-735頁。

(佐々木 1987:19)。これは一見するとつながりの見えない人文主義地理学の場所の概念、場所の感覚を示唆している。つまり、人文主義地理学においては、均質な拮がりである空間に対して場所概念がクローズアップされる。場所とは環境の主体として環境を生きる自己には、意味の中心として存立するものであり、それは自己のアイデンティティと重なり、自己の拠り所としてある。それゆえに、場所の意味 (sense of place) は、場所に対する自己の帰属感を確信させてくれる場所の感覚 (sense of place) として感得される。それはギブソンの見ている人間と環境との連動という事態であり、環境からのアフォードンスに自己が応答し同調することで、自己が環境に適所を得ることと同じ事態である。それゆえに、地理学者のエドワード・レルフは次のように言うことができる。「人間の経験における場所の意義が・・・はるかに奥深いものであるということは、破壊しようとする外部からの力に抗して自らの場所を守ろうとする個人や集団の行動を見れば明らかだし、またホームシックや、どこかの場所に対して郷愁を感じた経験のある人なら誰もが知っていることである。人間的であるとは、意味のある場所で満たされた世界で生きることである。つまり人間としてあるということは、自分自身の場所をもち、また知るということである」(Relph 1976:1)。

ギブソンの生態学的視覚論を踏まえたうえで、佐々木は、モノが見えるということは、実は目(眼球)がその対象の動きに微動し同調することでもってのはじめて成り立っていることを指摘したうえで、これを「なぞりアクション」と命名し、視覚はなぞりアクション、つまり触れることによって可能となるということ、そして視覚は実は触覚による対象把握に近いのだと言う(佐々木 1987:26-28)。世界の見えは、それに向かって動き同調する身体があってはじめて可能となる。知覚者が対象に向かい、それがアフォードするように身体を動かすことなしには、またそのように動く身体なしには、見えの世界は形成されないのである。アリストテレス、ギブソンを引き合いに出すまでもなく、彫刻家の高村光太郎(1883-1956)は芸術家の直観から、五感個別に併存するものでは決してなく、お互いに共通しているものであり、さらにはほとんどまったく触覚に統一されていると主張している。

私は彫刻家である。・・・私にとって此世界は触覚である。触覚がいちばん幼稚な感覚だと言われているが、しかも其れだからこそいちばん根源的なものであると言える。彫刻はいちばん根源的な芸術である。・・・人は五官というが、私には五官の境界がはっきりしない。空は碧いという。けれども私は言う事が出来る。空はキメ細かいと。・・・音楽が触覚の芸術である事は今更いう迄もないであろう。私が音楽をきく時、全身できくのである。音楽は全存在を打つ。・・・香とは微粒子なのだそうである。肥くさいのは肥の微粒子が飛び込むのだそうである。道理で私は香をも肌でかぐ。万物に匂の無いものはない。・・・嗅覚とは生理上にも鼻の粘膜の触覚であるに違いない。だから聯想的形容詞ではなく、厚ぼったい匂やざらざらえな匂・・・があるのである。味覚はもちろん触覚である。甘いも、辛いも、酸いも、あまり大まかな名称で、実は味わいを計る真の観念とはなり難い。キントンの甘いのはキントンだけの持つ一種の味的触覚にすぎない。入れた砂糖の延長ではない。・・・五官は互に共通しているというよりも、殆ど全く触覚に統一せられている。・・・彫刻家は物を掴みたがる。つかんだ感じで万象を見たがる。彼の眼には万象が所謂「絵のよう」には映って来ない。彼は月を撫でてみる。焚火にあたるように太陽にあたる。・・・風景には何処をみても微妙に組み立てられている。人体のように骨組がある。筋肉がある。肌がある。そうして、均衡があり、機構がある。重さがあり、軽さがある。突きとめたものがある。・・・彫刻家が君をつかまえるという時、其れは君の裸をつかまえるという事を意味

する（高村光太郎 1957：6-12）。

感覚は感官から取り入れられる単なる五感刺激の総称ではなく、身体と環境との協働・同調によってはじめて可能となる統合的なものであるという視点から、感覚への問いを辿っていくなかで、嗅覚をはじめとする近接感覚において身体性の問題領域が浮かび上がってくる。遠隔の対象に及ぶ視覚は身体性から離脱する傾向があるのに対して、近接した対象に制限される嗅覚・味覚・触覚は身体性と深く結びついている、とはよく指摘されることであるが、先述のごとく視覚そのものにも実は触覚と平行な身体の動きことが前提になっていることを踏まえるならば、諸感覚には通底して統合的な仕方では身体が、それも環境と連動する身体が働いていると言わねばならず、このような意味で、ギブソンの指摘した環境のアファードダンスと身体の応答は、とりわけ近接感覚の嗅覚・味覚・触覚において際立ってくるのではないだろうか。この事態に対する酷似した洞察として、精神医学者のテレンバッハは『味と雰囲気』（1968）において、身体運動に支えられた感覚である口腔感覚とその味覚と嗅覚のダイナミズムを次のように指摘する。匂いを嗅ぐことは、味わうことともに、人間の感性の前反省的に生命的な次元への通路となる「雰囲氣的なもの」を構成している。雰囲氣的なものとは、自我感情と世界感情が重なっている状態を意味しており、言うまでもなく実存哲学における「気分 (Stimmung)」の概念、ないしハイデガーの現存在分析における「状態性 (Befindlichkeit)」の概念に近い。人間においては口腔で食べ物を味わうと同時に香りを嗅いでいる。つまり匂いと味は口腔感覚に統合されている。それゆえに、「口腔感覚においては嗅ぐことと味わうことは元来一つのことであり、相補的である。味わうことは、いつも同時に嚙んだり、すすったりすることであり、嗅ぐことは呼吸することである。・・・感官と世界とのダイナミックな関係。相応する運動との関係を断ち切るとするならば、つまり呼吸や嘔むことをやめてしまうならば、知覚できるものも知覚できなくなってしまう」（テレンバッハ 1980：14-15）と説明する。

感覚とはそもそも人間と環境世界の同調・協働であるという事態、そしてその際に働いている身体のあり方については、とりわけ近接感覚である触覚・嗅覚・味覚において際立ってくる。人間存在は、志向的であることによって世界に向けて自己超越的でありつつも、同時に世界にすでに晒されている。言い換えれば、自己は自己であろうとするときにすでに世界に包み込まれている、つまり環境 (Umwelt) となっているのである。私が何かの匂いを嗅ぐときには、息を吸い込む。私の嗅ぐ行為はすでに呼吸によって外界に晒されている。私が何か手に触れるとき、私はその何かに触れている。それゆえに視覚のような人間の志向性が際立つ感覚よりは、触覚・嗅覚・味覚にあっては、自己と世界との連続性が鮮明になってくるとともに、身体を有するがゆえの人間の受動性、他律性、偶然性、脆さ、傷つきやすさが際立つ。つまり、感覚とは触発されることであるという原義がよみがえってくる (Diaconu 2003)。

## 5-2) 匂いは風景となるか

風景の立ち現れにおける諸感覚の関係性を考察するにあたり、私たちはこれまでは視覚に凝うことなく準拠していた。しかし、視覚がそもそも環境世界を対象化し自らに距離を置き分析に集中するあまり、環境世界と自己との関係、環境世界に関わる人間のあり方・振る舞い方が見失われがちとなった。そのような事態に対して人文主義地理学や環境心理学において、人間の回復を企図しサウンドスケープ、匂いによる空間知覚を扱うスメルスケープ、身体のリズムとしてのボディスケープ、心象風景としてのインスケープなど、さまざまな様相における環境知覚の考察が試みられるようになったわけである (ポーティウス 1992, 佐古順彦・小西

啓史 2007: 52)。翻って考えてみると、「風景（オランダ語 *landschap*, ドイツ語 *Landschaft*; ともに8世紀末）」の原義には、その要素（*land*「田舎、土地」）からして、「土地とそこに暮らす人びととの関わり」がすでに含意されており、単なる物理的な眺めではないことからしても、風景に対する人間の本質的関わりを回復する企図——それは風景の人間学的論究に接続する——は必然の成り行きであろう。

改めて問う、風景とは何か。諸家は次のように風景を定義している。

風景とは単に眼に見える色や形を指しているばかりでなく、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚のいわゆる五感によって感じることでできるものすべてを含んでいる。……一言でいえば、「風景とは関係である」ということである（柳 1990: 9, 181）。

風景は全感的で全体的なものである。……風景とは環境世界の、場所の、人間の〈存在様相〉であり、時間と空間の表情なのである。風景は宇宙的空間の、大地の相貌だが、ある意味では、ほとんどこの私自身であるともいえるだろう（山岸 1993: 8）。

風景は感覚で捉える風土性（*メディアン*）の現れである。それは視覚、聴覚、嗅覚等に直接つかみ取れる方法で風土の意味をあらわす。だから、風景は風土性の問題のなかで重要な位置を占めることが分かるだろう。……というのも風景とは一つの全体の単に現象的な側面ではないからだ、全体は現象的なものだけではできていないのである（バルク 1992: 44）。

風景とは、通常考えられるような視覚に限られた感覚対象ではなく、私たちが全感覚で周囲の世界に関わる在り方なのである。「印象」として現れる風景は、そのような感覚が記憶として蓄積され成り立っている（納富 2002: 97）。

本論文の「場所としての風景」の立場を踏まえ改めて列記した風景の諸定義からも明らかのように、風景とは私が身体をもって環境世界に関与し同調するところに現出する全感的な関係の統一体であった。ここに風景の実在感、リアリティの所在がある。風景にはさまざまな匂いが伴い嗅覚による認知もあり、肌をなでる風や、発汗とともに感じる日差しの熱さを皮膚感覚で認知することもある。このような様々な感覚様態を通じて風景を全体として捉えることで、初めて実在感ある風景が立ち上がってくる。風景が視覚にのみ限定されてしまうならば、風景は固有の場所から遊離し、絵はがきのようなものになってしまう。風景が関係性であるとは、場所と自己の関係性、身体と環境世界との全感覚を通した関係性を集約し風景という現象が成り立つことを意味している。それゆえ、諸感覚の関係性に何らかの歪み・欠落が生じると、風景は風景として成り立たなくなる。

このことに関連し、「半田の酢と酒、蔵の街」として「かおり風景百選」に選定された愛知県半田市<sup>3)</sup>のスメルスケープを調査した森山は興味深い指摘をしている。

3) 愛知県半田市は、「半田の酢と酒、蔵の街」として「かおり風景百選」に選定されている。半田市は江戸時代から酒造りが盛んで、その製造過程から生じる大量の酒粕を利用して造る粕酢は江戸の握り寿司によく合うと人気があったそうである。現在でも酢と酒造りは盛んに行われており、特に酢工場付近を歩くとほのかに酸っぱいかおりが漂ってくる。そのかおりは黒板囲いの醸造蔵とその周辺の景観を構成する1つの重要な要素となっている。

ところで、半田市の環境大気を採取する際、酒工場や酢工場周辺のかおりは、その場の雰囲気によく合って心地よく感じました。しかし、その大気を持ち帰って嗅いでみると、決して良いかおりでなく何だか変な臭いに感じたことが印象的でした。このかおりは、半田市の「酢と酒」の歴史背景や名産品としての知名度、醸造蔵を中心とした町の景観があつてこそで、これらが一つになり初めて「半田市のかおり風景」として成り立つと思いました（森山 2014 : 13）。

森山の指摘は、視覚像としてのランドスケープも、サウンドスケープも、スメルスケープも単体としては風景たりえず、風景はあくまで人間と環境世界との協働・同調を前提としてすべての感覚を集約する全体・統一としてあることを、再確認させてくれる。半田市の酢造り・酒造りの歴史とそれを物語る工場、醸造蔵という「場所としての風景」から採取された大気を、その場所から隔たった実験室に持ち帰り嗅いだとしても、決してその場の風景は再現されず、逆にそのスメルスケープとしての魅力は半減し、場合によっては不快感さえ抱く。それゆえ、風景全般という文脈においてスメルスケープを論じ、検討するうえで、スメルスケープがそれ自体で風景（scape）として成り立つか否かを問題とするのではなく、関係性の総体として現出する風景（の実在性）に関して匂い・香りがどのように働いているのか、どのような位置にあるのかを問題とするべきであろう。そこで以下ではスメルスケープについて、①匂いと空間・場所、②匂いと記憶・時間の問題、③嗅覚順応の3つの論点から考察する。

#### ①匂いと空間・場所

様々な感覚様態を通じて風景を全体として捉えることで、初めて実在感ある風景が立ち上がってくる。視覚が空間を対象化し、その統一的全体をひとつの風景として切り取るのに対して、匂いは拡散的であり明瞭な範囲も輪郭をもたない。つまり空間的には非連続的で断片的なものに留まる。しかし匂いは、視覚や触覚などに加え、風景、場所の意味を豊かにし、実景に実在感を与える。確かに、スメルスケープと言えばスケープ（景）という言葉の含意から、視覚的印象と同じく空間的な秩序・構造をもち、場所を明確に縁取っているかのように受け取るけれども、嗅覚自体の特徴に照らすならば、スメルスケープは、他の感覚と分離しては成り立たないだろうし、それゆえに空間に準拠した考察も難しい。しかし私たちが共通して理解しているのは、場所は匂いによって個別に特徴づけられ、また類型化できるということである。それがまた場所の実在感を高めてくれる。少しばかり歴史を振り返るならば、近代化・都市化を進める欧米諸国の都市の匂い、植民地時代の名残のある発展途上国の市場や商業地区に立ちこめる匂いは、それぞれの土地・場所を特徴づける典型的なスメルスケープを作り上げていた。「大陸、国家、地域、近隣、とりわけエスニック集団、そして、家には、それぞれ特有のスメルスケープがある」（ポーティウス、1992 : 128）。こうして匂いは近接感覚であるがゆえに、特定の場所と結びつき、スメルスケープを豊かなものとする。

さらに匂いと環境世界・風景の実在性との関係を理解するうえで重要な導きとなるのは、アスノミア（asnomia）、すなわち嗅覚脱失の症例である。アスノミアは、嗅覚系の神経や嗅覚を司る脳の部分、およびそれらをつなぐ回路が病気・事故による炎症・衝撃などで大きな障害を被ることが原因で発症すると考えられている。交通事故による頭部外傷で嗅覚を失った米国の若い女性が数年かけて嗅覚を取り戻すまでを自らに記したモリー・バーンバウムの『アスノミア』では、彼女自身シェフを目指していた人だけに嗅覚・味覚に関する記述が詳細かつ正確であり、発症直後の自分と環境世界の大きな変化、そして回復のプロセスが丁寧に辿られてい

だけでなく、匂いに関する脳科学・神経学の著名な研究者たちからの助言・情報も有益である。

アイスクリームはぼてつとした冷たい泥。カフェラテは熱い、ときにゼラチン質の液体。ヨーグルトを食べるのはなめらかな冷たさを感じるため。……いざ食べてみても、ステーキは暖めた段ボールと区別がつかない（バーンバウム 2013：51）。

食べるという行為において嗅覚と味覚は直接結びついている。先の箇所ではレンバウハを引用し説明したように、口腔感覚において嗅ぐことと味わうことは統合され1つになっているのである。ゆえに匂いが欠ければ、温冷感覚・重量感・部分的な質感のみが残されるので、ヨーグルトは冷たい泥、ステーキは温かい段ボールとなってしまう。さらに嗅覚の欠落が風景の実在感を大きく削いでしまうことが、以下でも体験として印象的に示されている。

八月は、わが家では初めて暖炉に火を入れる月でもある。煙と燃える薪の甘い香りで、暖かい火に引きよせられるのであった。でもにおいがなくなると、自分の周囲がにわかに見慣れない、よどんだ世界に見えた。まるで、映画のなかで動いている自分を見ているようだ。この場にながら、完全に参加していない。興味はあるが、夢中にはなっていない（バーンバウム 2013：46）。

## ②匂いと記憶・時間

視覚においては志向性が際立ち対象に向かうので、視覚の世界は対象世界（an object world）であり、それに対して聴覚による音の世界は動的な出来事の世界（an event world）である。それを踏まえるならば、確かに嗅覚は匂いの発生源を特定しようと嗅ぐときは対象志向的ではあるが、それとは対照的に、気づいたときにはすでに匂いに包まれているという事態も、嗅覚に特有なものである。したがってこの場合には、匂いの世界も断片的な安定しない出来事の世界と言ってよいだろう。しかしその反面、他の感覚に比べ匂いは記憶に深く結びついている。風景とは実景という仕方で、常に今ここに現前し自己と対峙しているだけのものではない。むしろ風景と人間との関係性をより具体的に辿っていくうえで重要なのは、個人や集団の記憶・歴史にある風景、つまりポーティウスが言うところの「心の風景（the landscape of the mind）」である。風景とは現前する風景の知覚であると同時に、記憶の風景・心象の風景なのである。「私たち人間を生物学的存在と規定し、感覚器官や脳細胞の整理に対応する風景を探ろうとするのであれば、視覚以外の感覚も関与する記憶の地層として集積された風景を見落とすわけにはいかない。今見ている風景だけでなく、幼時や少年時代以来の体験や記憶が積み重なり、溶け合い、現在とも交錯して、私たちの風景を形成する。これらの無数の記憶への心理的な視点をもう一つの断片的なユニット（局所的な意識の中心）と見なし、その個々の記憶への視点の集積体として私たちの視点＝主体が機能すると考えるならば、なぜか長く忘れ去られていた別の風景の原野が甦ってくるような気がする」（中村英樹 1992：152）。この点から匂いは際立った重要性をもってくる。匂いに結びついた記憶は他の記憶よりも強い場合がある。匂いと記憶との関係については、近年の心理学や脳科学の研究によって詳細が明らかになってきたところである。

心理学の実験（Engen, 1973, 1977）によれば、我々は20%程度の正確さでしか匂いを判別す

ることはできないが、他方では1年後にほぼ同じ程度の正確さで、これらの匂いを思い起こすことができる。それと対照的に、視覚的認識は、ほぼ100%の正確さで正当率を示すが、時の経過とともに急激にその正確さは低下する（ポーティウス 1992：138）。

周知のように、嗅覚と記憶とのつながりを文学作品においてはじめて描写したのは、マルセル・ブルーストであると言われている。『失われた時を求めて』（1913）の冒頭にある一節である。紅茶に浸したマドレーヌの香りが語り手の幼年期の記憶を鮮明に蘇らせる（付随的想起）。それ以降神経科学や心理学に大きな反響・論争を呼び、一般に「ブルースト効果」と呼ばれるようになった（ギルバート 2009：第10章）。匂いが人間のライフサイクルを通じてもつ意義・重要性に関する十全な研究はまだないようなので断定はできないにせよ（ポーティウス 1992：144）、時間の経過とともにおぼろげになる視覚記憶に対して、嗅覚記憶は自己の来歴と重なる記憶の風景をその都度蘇らせ、またある意味で更新しつつ持続させるとは言えるだろう。自分には日々の暮らしのなかで、環境の主体として、つまり当事者として関わり経験している場所があり、その場所の豊かな意味と実在感、リアリティが自分のアイデンティティの一部となっている場合に、そのような経験と実感の集積が記憶の風景として自分のなかに定着するとき、自己の来歴を象る原風景となる。その点では、個人が暮らしのなかで日ごと、月ごと、季節ごと、そしてそれらに関連する行事ごとに繰り返し経験する匂いは、スメルスケープとして重要な要素となる。

### ③嗅覚順応

感覚器官はそれぞれに環境の変化に順応する。例えば、まばゆい日差しのある場所から暗い部屋に入ると、目が慣れるのにしばらくかかる。逆に暗い映画館から真昼の市街に出ると逆の現象が起きる。これが視覚順応（visual adaptation）という現象である。同じく匂いについても嗅覚順応（olfactory adaptation）がある。はじめ嗅いだときにはきつく感じた匂いが、ずっと嗅いでいるうちに弱まっていく、極端な場合には、しばらくその匂いを感じなくなってしまふ。香水を嗅ぎ分けたり調合している調香師たちは、香水を嗅ぎ続けると鼻がきかなくなってくるとのことで、仕事柄、嗅覚順応には注意しているという（ギルバート 2009：123）。嗅覚順応は、匂いに晒される時間が長くなるほど、その匂いに順応することであるが、すべての匂いに対して同時に起こることはない。つまりある特定の匂いに対する嗅覚順応は、ほかの匂いには影響しないのである。例えば、ニンニク工場で働いている場合、その人が感じなくなるのはニンニクの匂いだけで、それ以外のバラやレモンなどの匂いに対する感度は低下しない。この嗅覚順応は、スメルスケープの形成にとって1つの問題を孕んでいる。それは、文学作品を見てもわかるように<sup>4)</sup>、それぞれの土地・場所固有のスメルスケープを記述しているのは、その大部分が旅行者などのアウトサイダーであるということに示唆されている。つまり、その土地にずっと長く暮らしている人は、その土地固有の匂いに気づかなくなり鈍感になりやすい。人が場所に根付き、その統一的なまとまりとしての風景を生きていくときに、スメルスケープが果たす役割を踏まえると、嗅覚順応に起因する事態は留意すべきことになる。

---

4) ポーティウスは自著において、ジョージ・オーウェル『パリ・ロンドン放浪記』、グレアム・グリーン『自伝』などをスメルスケープの記述が豊富な作品であると評価している。またギルバートは『匂いの人類学』において、アメリカの広大なスメルスケープを比類なきまでに捉えたのは詩人のホイットマン（『草の葉』）だったと述べている（ポーティウス 1992: 139, ギルバート 2009: 61）。

レルフが指摘するところでは、場所の本質は、場所の外側 (outsideness) と異なる内側 (insideness) の経験にある (Relph 1976: 49)。内側の創出とは、空間を分節化し空間のなかに外側から分離された、危険に対する安全、緊張に対する安らぎ、混乱に対する秩序の領域を創り出すことであり、場所に対して「内側」になるということは、それだけ場所に帰属するということを意味する。そしてより深く「内側」になればなるほど、自己のアイデンティティが場所のアイデンティティと一体化する。確かに内側-外側の区分は単純ではあるが、場所の本質を示すものである。ここにおいて場所は内側から捉えられた統一として、即ち風景として立ち現れる。場所の内側において、意識的であれ無意識的であれ場所を自分自身の一部として生きている者にとって、風景は自分をも包み込むものであり、まだ自分自身も風景のなかに生きるものであるという実感を抱く。その点からすると、先述のごとく人びとが地域の暮らしのなかで日ごと、月ごと、季節ごと、そしてそれらに関連する行事ごとに、節目を自覚するようにして繰り返し経験する匂いは、場所の感覚、風土感を醸成するスメルスケープとして重要な要素となるだろう。しかし、先の具体例にあった地域の産業を象徴する酒や酢の醸造所など、その地域に常態的に存在する匂い・香りの場合には、そのスメルスケープが嗅覚順化の現象によって日常性に平板化・均質化され、現実醸造所が閉鎖されなくとも、スメルスケープとしては消滅する可能性もある。その点からすると、場所の外側において、内側から風景を生きることのない人たち、つまり旅行者などのアウトサイダーの場合はどうなのであろうか。スメルスケープに関してはとりわけその地を訪れたアウトサイダーよる気づきと記述が多い。一般的に言えば、慣れ親しんだ匂いは肯定的に評価され、未知の匂いは否定的に評価される。あるいは、前者が目立たないで感知されにくく、後者が異質なものと感知されやすいという傾向はある。これに照らすならば、アウトサイダーにとっては、その場所の未知の匂いは際立ち鋭く感知されるけれども、スメルスケープはあくまで風景全体の一局面である以上は、風景全体の評価によって修正されもことも強化されることもある。しばしば指摘されることではあるが、始めて訪れた場所であるにもかかわらず、旅行者に郷愁や愛着に似た感情が喚起されることがある。それは実景に自分の記憶の風景が重ね合わされ、場所の感覚が喚起され、自己と風景・場所との一体性を感得するということであろう。そのような場合には、未知の匂いも受容できるもの、あるいは好ましいものになる。そのようにしてスメルスケープは風景の実在性・リアリティを確かなものとする。

## 6. おわりに

本論文の動機は、グローバリズムが文化の画一化を拡大し、場所に根付く人びとのあり方・生き方を映し出す風景が没場所性に変質する「風景の危機」という時代状況に対する問題意識にあった。そこで、そのような危機意識を共有するところから生まれたサウンドスケープおよびスメルスケープの思想に着目し、それらの前提となっている人間と環境との関わりの捉えなしとして、五感からなる私たちの感覚の問題から議論を開始したわけである。私たちは身体である。しかし、生態学でも言うように私たちの生存を可能にしている環境からの働きかけに、私たちは身体全体で関わり応答しているのか。そのようなことをいちいち意識せずとも、無意識のレベルでちゃんと感覚に応答できているから無事このように生きているのだと言わんばかりに、自らの環境・感覚に無関心となり鈍感となりはてているのではないか。私たちは環境(自然システム・社会システム)のどこに適所(ニッチ: 住み場所)を得て生きているのか。

「あなたはどこにいるのか、あなたはどこで暮らしているのか」という問いかけに答えることは、「あなたは誰なのか、あなたはなにものなにか」という問いかけに答えることにほかならない。その意味で、人間とは場所である。しかし私たちはこの問いかけに十分な回答ができていないのではないか。こうした認識を踏まえ、視覚偏重からの転換として、認知心理学・環境心理学ないし人文主義地理学に見いだされる近接感覚、とりわけ嗅覚、匂いに関する考察を導きに検討をすすめた。

歴史家コルバンの『においの歴史』の詳論するところでは、匂いに関して現代の私たちに顕著な傾向である、悪臭を嫌悪し芳香を嗜好する感性や無臭空間を求める態度のルーツは、18世紀中頃から19世紀末頃の西欧にまで遡る。この時期に気体化学が登場し隆盛を迎え、匂いに対する人びとの感性に起きた大きな変化「嗅覚革命」が起こった。例えば当時のパリでは、近代化・都市化のなかで糞尿・屠殺場・工場などの公共空間の「悪臭」が非難され、新しい科学である公衆衛生学の観点から悪臭追放・除去の施策が進められた。例えば、糞尿の垂れ流しの禁止、道路の舗装・清掃、排水路の整備、換気（瘴気の無秩序な循環の制御）、悪臭源となる施設の郊外への移転が実施された。また、社会のエリート層の間で趣味・流行の変化があって、きつい匂いに対する学者たちの非難が受け入れられるようになり、きつい香水の覆いによってかえって自分の不潔さを人に教えてしまう愚を犯すべきでないという身繕いのしきたりが定着した。これを契機に麝香などの動物性香水が排除され、ラベンダーなどの植物性香水が流行する。こうして匂いに対する人びとの嗜好・感性に大きな変化が生まれた（コルバン 2002：第I・II部）。この嗅覚革命で留意すべきことは、匂いに関する人びとの関心が、自然的発散物から社会的発散物に移ったことにある。そして匂いが差別と排除につながり、貧民とそのあばら屋の放つ悪臭が嫌悪され、悪臭退治の矛先は公共空間から私的空間に移されるようになったのである。人びとはそれまでは匂いに対しては寛容であったのが、嗅覚革命の時代を境に、敏感にそして不寛容になっていった。匂いに対するこのような感性は現代人、とりわけ先進諸国の人間において極限に達しているように思われる。しかしながら、匂いに対して不寛容であると言っても、それが多様な匂いに対して繊細に反応し峻別できるとは限らないだろう。人間の好き嫌いが激しい人が、人間の性格や性向に十分注意を払っているとは限らないのと同様である。したがって、匂いに対して不寛容である、好き嫌いが激しいことは、匂いに対して無関心・鈍感であることとは矛盾しないのでないだろうか。この姿勢・感性が現代のスメルスケープのあり方を考察する場合に考慮すべき点であろう。サウンドスケープの研究の端緒が、都市部の騒音問題への対応にあったように、スメルスケープの研究も都市部（工場の煤煙・自動車の排気ガスなど）や農村部（大規模農場の下肥、畜産場の不快な匂いなど）の臭気公害に発端がある。つまり私たちを取り巻く匂いは、否定的な問題としてしか考えてこられなかったわけで、研究は主に臭気公害への対処法であったことを勘案すると、匂いはまずは消されるべきものとして社会化されてきたという点では、現代も近代初期の西欧の感性を引き継いでいると言わねばならない（ポーティウス 1992：146-147）。

「場所としての風景」の観点からすると、人びとは都市部であれ農村部であれ、みずからの生活を通して場所に根付き場所に帰属しながら、自らのアイデンティティを場所のアイデンティティに重ね、「風景のなかで風景を生きる」自分自身に帰属感と意味そして安らぎを見いだしてきたはずである。しかし没場所性の概念が示すとおり、効率・機能・経済性などを最優先する現代社会の要請のなかで、自分が当事者として関わり・ケアする生活の場所が、都市計画などの制度設計や社会基盤整備という仕方で個々人の裁量から離れ公的権力により整備され管理されるようになった。こうして、日々場所に関わる私たちの行為も外部化され、当事者意

識が薄れていくと同時に、場所も、そして風景も管理され抽象化され、結果として予め枠組みの与えられた事業・制度のなかで画一化されてしまう（精山・山田 2015）。この動きは匂いを社会問題化し公的権力が、個人の私生活にも関わる領域にまで踏み込んで、匂いを脱臭・無臭に向け管理した「嗅覚革命」の時代と同類ではないだろうか。これが現在亢進している風景の危機である。それゆえにこそ、「音風景百選」であれ「香り風景百選」であれ、その風景に住まう人びとの当事者意識が希薄になっていくようであるならば、それらはただのお役所の指定プロジェクトと化す。反面そのように環境省が指定し地方に固有なスメルスケープの維持・保護を喚起しなければならないところまで来ていると解することもできる。以上の問題背景を念頭に置き、私たちには風景観を更新しスメルスケープへの意識を醸成し高めていくことが強く求められていることに改めて思いを致すべきであろう。

スメルスケープに自覚的になる、そしてそのような感覚を常に抱きながら自らの暮らしを営み、自らの風景を生きていくためには、これまでに受け継がれてきた香りの文化を捉え直すことが一つの導きになるはずである。ここは最終の部分でもあり、本論文の主旨を大きく逸脱することになるので立ち入らないけれども、香りの文化の伝統として日本の香道をあげておくべきだろう。岩崎陽子によれば、香道が示唆する嗅覚の特徴は共感的なあり方にある。見て美しいものは香り、香しいものはまた見た目にも美しいという古代の感覚は、万葉集では梅の「にはほひたる」が「色づく」の意味に重なること——嗅覚を表現する語彙が不足している事情はあるにせよ——に窺えるもので、そのような感覚世界が香道に凝縮している、また「聞香」という作法に聴覚と嗅覚の一体性が象徴されている。つまり、香・香道において嗅覚は単独で感覚されるのではなく、視覚や聴覚、味覚と浸透し合い、混ざり合って感じ取られる。あるいはそれ以上に嗅覚は、他の感覚に助けられて存立しているという意識が見受けられるのである（岩崎 2003）。香道に注目したところでも同じく理解されることは、匂いが匂いとして立ち上がるには、身体性を前提とした感覚全体の動きがなくてはならないのと同じく、スメルスケープの実在感が確信されるには、ランドスケープ、サウンドスケープが一体となっていないとすることはならないということである。本稿では、このような風景の統合的な成り立ちについて、感覚が身体と環境との協働・同調という動態によるものであることを確認し、「対象としての風景」(2-2) から「場所としての風景」(3-1) への転換として、サウンドスケープ、スメルスケープへの風景概念の拡張を跡づけた。その際に導きとなったのが、場所概念の論究を中心課題とする人文主義地理学の洞察であった。そもそも地理学が人間と環境との関わりを研究するものであるかぎりには、この環境世界（の存在者）との関わりを可能とする身体とその感覚から出発することとなる。そしてその身体性が際立つ嗅覚・味覚・触覚といった近接感覚において、環境世界は外部の対象ではなく、環境世界の主体としての自己が生きる意味と経験の場所となる。そこから立ち上がるのが場所としての風景であった。

本研究の道筋としては、最初に、嗅覚・味覚・触覚といった近接感覚に関する問題領域において、環境世界と私たちとの感覚的関わりの本質、そして場所・風景が立出するときの諸感覚の役割をクローズアップし、次に、そこからスメルスケープ思想の哲学的基礎付けの作業を再起動することを構想していた。しかし、本論文では、当初目指していたスメルスケープの概念の哲学的基礎付けには至らず、あくまで諸学に散見される匂いに関する議論を一覧しこれを整理する段階に終わったのではないかと思う。匂いに関する文献に広くあたったが、学術的とはいえないものが多かった。そもそも嗅覚が成り立つメカニズムについては脳科学・神経学においてはまだまだ未知の領域が残されている現状を考慮すべきであろう。確かに、人間と環境との関係という文脈で、認知心理学・環境心理学では匂いを始め近接感覚について多様な研究

があるにせよ、地理学の分野では人文主義地理学・感覚地理学でポーティウス等がスメルスケープ概念をクローズアップしたわりには、それ以降の本格的な研究は受け継がれていないようである。他方、美学や近年形を整えつつある環境美学の分野では、ディアコヌが触覚・嗅覚・味覚について現象学的研究を進めており注目に値する。しかし残念ながら、総じてスメルスケープの哲学的分析ならびにこの概念の基礎付けについては十分なものは未だないと言ってよいのではないかと(Drobnick 2006)。こうした現況を念頭に、スメルスケープについて哲学・人間学の観点からの分析を進め、スメルスケープ概念を風景思想・環境思想において基礎づけることが、本論文以降に残された研究の道筋である。

## 参考文献

- アッカーマン, ダイアン (1996) 『「感覚」の博物誌』岩崎徹・原田大介訳, 河出書房新社。
- アリストテレス (1959) 『形而上学 (上)』[岩波文庫], 出隆訳, 岩波書店。
- 岩崎陽子 (2003) 「香り」と芸術-日本の伝統芸術「香道」をめぐる『研究紀要』(奈良芸術短期大学) 34-50頁。
- 内田芳明 (2001) 『風景の発見』[朝日選書], 朝日新聞社。
- エンゲン, T (1990) 『匂いの心理学』吉田正昭訳, 西村書店。
- 奥田治 (1986) 『香りと文明』講談社。
- オング, ウォルター・J. (1991) 『声の文化と文字の文化』藤原書店。
- 勝原文夫 (1999) 『環境の美学-ムラの風景とアメニティ』論創社。
- カンボレージ, ピエール (1997) 『風景の誕生-イタリアの美しき里-』中山悦子訳, 筑摩書房。
- ギブソン, J. J. (2011) 『生態学的視覚システム-感性を捉え直す-』佐々木正人ほか監訳, 東京大学出版会。
- ギルバート, エイヴリー (2009) 『匂いの人類学』勅使河原まゆみ訳, ランダムハウス講談社。
- クラーク, ケネス (1967) 『風景画論』佐々木英也訳, 岩崎美術社。
- クラッセン, コンスタンス (1998) 『感覚の力』陽美保子訳, 工作舎。
- 小泉武策 (2001) 『登山の誕生』[中公新書], 中央公論新社。
- コルバン, アラン (1990) 『においの歴史-嗅覚と社会的想像力-』山田登世子・鹿島茂訳, 藤原書店。
- コルバン, アラン (2002) 『風景と人間』小倉孝誠訳, 藤原書店。
- 佐古順彦・小西啓史編 (2007) 『朝倉心理学講座12 環境心理学』朝倉書店。
- 佐々木正人 (1987) 『からだ: 認識の原点』東京大学出版。
- シェーファー, R・マリー (1986) 『世界の調律-サウンドスケープとはなにか』鳥越けい子・小川博司ほか訳, 平凡社。
- シェーファー, R・マリー (1992) 『サウンドエデュケーション』鳥越けい子訳, 春秋社。
- 志賀重昂 (1995) 『日本風景論』[岩波文庫] 岩波書店。
- ジャケ, シャンタル (2015) 『匂いの哲学-香り立つ美と芸術の世界-』岩崎陽子ほか訳, 晃洋書房。
- ジンメル, ゲオルク (1999) 「風景の哲学」, 『ジンメル・エッセイ集』川村二郎編訳, 平凡社, 67-89頁。
- 精山昭敏・山田圭二郎 (2015) 「感性と風景: 「感性都市工学」への挑戦」京都大学学術リポジトリ「KURENAI紅」([https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/193516/1/live.cities\\_96.pdf](https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/193516/1/live.cities_96.pdf))。
- 高村光太郎 (1957) 「嗅覚の世界」『高村光太郎全集』(第5巻), 筑摩書房, 6-12頁。
- 田村麗丘 (1999) 『風景と景観』公害対策技術同友会。
- デカルト (1997) 『方法序説』[岩波文庫], 谷川多佳子訳, 岩波書店。
- テレンバッハ, H. (1980) 『味と雰囲気』宮本忠雄・上田宣子訳, みすず書房。
- 中村英樹 (1992) 「古典的知覚を超える風景」, 『現代思想』(青土社), 20 巻9 号, 148-162頁。
- 中村雄二郎 (1979) 『共通感覚論』岩波書店。
- 中村良夫 (1982) 『風景学入門』[中公新書], 中央公論社。
- 西村清和 (2012) 『日常性の環境美学』勁草書房。
- 納富信留 (2002) 「哲学的風景論の可能性」, 佐藤康邦・安彦一恵 (編) 『風景の哲学』ナカニシヤ出版, 81-101頁。
- バーンバウム, モリー (2013) 『アスノミア-わたしが嗅覚を失ってからとり戻すまでの物語』ニキ・リンコ訳, 勁草書房。

- 樋口忠彦 (1993) 『日本の景観』 [ちくま学芸文庫] 筑摩書房。
- 開龍美 (2016) 「遠い自然からの問いかけ—人間学的考察—」, 『人間学紀要』 (上智人間学会), 46号, 103-119頁。
- 古川彰・大西行雄編 (1992) 『環境イメージ論』 弘文堂。
- ブルーメンベルク, ハンス (1977) 『光の形而上学—真理のメタファーとしての光—』 生松敬三・熊田陽一郎訳, 朝日出版。
- ベルク, オギュスタン (1990) 『日本の風景・西欧の景観』 [講談社現代新書], 篠田勝英訳, 講談社。
- ベルク, オギュスタン (1992) 「風景の近代を超えて」 三宅京子訳, 『現代思想』 (青土社), 20 巻9 号, 44-61頁。
- ポーティウス, ダグラス (1992) 「スメルスケープ」, 米田巖・湯山健一訳編 『心のなかの景観』 古今書院, 111-151頁。(J. Douglas Porteous, "Smellscape," in *Progress in Physical Geography*, 1985 9: 356, <http://ppg.sagepub.com/content/9/3/356>.)
- ポコック, J・ダグラス (1992a) 「地理学における人文主義的視角」, 米田巖・湯山健一訳編 『心のなかの景観』 古今書院, 5-21頁。
- ポコック, J・ダグラス (1992b) 「音と地理学者」, 米田巖・湯山健一訳編 『心のなかの景観』 古今書院, 75-93頁。
- 宮城俊作 (2001) 『ランドスケープデザインの視座』 学芸出版社。
- 柳哲雄 (1990) 『風景の構造』 創風社出版。
- 山岸健 (1993) 『風景とは何か』 日本放送出版協会。
- 柳田國男 (1986) 「豆の葉と太陽」, 『定本柳田國男集 第二巻』 筑摩書房, 265-430頁。
- ユクスキュル, ヤコブ・フォン&クリサート, ゲオルク (1973) 『生物から見た世界』 日高敏隆訳, 思索社。
- ラスキン, ジョン (2002) 『風景の思想とモラル』 内藤史朗訳, 法藏館。
- リルケ, R・M (1953) 「風景について」, (大山定一他訳) 『マルテの手記・ロダン』 [現代世界文學全集6] 大山定一ほか訳, 新潮社, 282-287頁。
- Cresswell, Tim (2004) *Place: A Short Introduction*, Massachusetts: Blackwell.
- Diaconu, Madalina (2003) "The Rebellion of the «Lower» Senses: A Phenomenological Aesthetics of Touch, Smell, and Taste," in: *Essays in Celebration of the Founding of the Organization of the Phenomenological Organizations*, Ed. Cheung, Chan-Fai, Ivan Chvatik, Ion Copoeru, Lester Embree, Julia Iribarne & Hans Rainer Sepp, web-published at [www.o-p-o.net](http://www.o-p-o.net).
- Drobnick, Jim (ed.) *The Smell Culture Reader*, Oxford: Berg, 2006.
- Naess, Arne (1989) *Ecology, Community and Lifestyle: Outline of An Ecosophy*, translated and revised by David Rothenberg, Cambridge: Cambridge University Press. (アルネ・ネス (1997) 『ディープ・エコロジーとは何か』 齊藤直輔・開龍美訳, 文化書房博文社)
- Porteous, J. Douglas (1990) *Landscape of the Mind: Worlds of Sense and Metaphor*, Toronto: University of Toronto Press.
- Ralph, Edward (1976) *Place and Placelessness*, London: Pion. (エドワード・レルフ (1991) 高野岳彦ほか訳 『場所の現象学』 高野岳彦ほか訳 筑摩書房)

(2018年10月26日受理)